

2002年の本。

「自立した学習者への道」ということを説明するときに、どうしてもうまく日本語で表現できなくて英語を使うんですが、「ディペンデンス、インディペンデンス、インターディペンデンス」という言い方を使っているんです。

ディペンデンスは「依存」ですね。依存していれば当然自立していない。じや、インディペンデンスしていればいいのか。インディペンデンスということは「依存していない」という意味です。だから、ここはどっちかという、きちっと立っているというよりも、依存していることを否定している、人なんか頼らないぞ、とつっぱっているイメージ。

で、インディペンデンスを乗り越えてインターディペンデンス、つまりわからないことがなにかということ自分でしっかりわかって、わからないことに関しては人の援助を受けることにこだわらない。援助を受けても、それは決して依存ではないと言い切れる状況、インターディペンデンスになってはじめて自立なんだ、と。

~~~~~

interdependence とは【意味】相互依存

~~~~~

「頑張っていれば、いつか必ず結果は出るんだよ」というのは神話です。

太平洋戦争に日本は負けました。負けた理由はいろいろあると思いますが、多くの国民はアメリカの圧倒的な工業生産力、大量生産の力に敗北したと思った。モノづくりで負けた最大の理由は、創造的能力ではなく、必要なクオリティのものを大量に作り出す力、製品の標準性、均質性だと考えた。

明治の最初の工業化は、ごく限られた人たちが、それができるようになればいいんだという体制だった。比喩的にいうとある一人が優れた能力を持ち、優れたものをつくり、製品化することができればよかった。

戦前の日本製品は「安かろう、悪かろう」といわれた。ある一定の性能を持ったものを大量に生産することができなかったんです。複雑な工業製品、たとえば飛行機なら飛行機の生産をしようとしたときに、そのパーツを均質につくる技術が日本には乏しかった。

よく言われる話だけれども、戦艦大和を作ったというのはすごいことだし、零戦という飛行機は驚異的な能力だった。ところが悲しいかな、それを大量に安定してつくる力がなかったんです。零戦という飛行機を設計することもできた。実現化することもできた。ところが、それを大量につくり続けていくという力がなかった。

敗戦後、それを日本人は痛感した。

一つ一つの技術に関しては、理解はされていたし、モノをつくることもできた。ごく少数の人たちが集まって、その飛行機一機をチームでつくるという技術はあった。

でも、その部品を分散してつくるという技術がなかった。「分散してつくる力」というのが新しい力だった。太平洋戦争に負けたということは、そんな新しい力を持っているアメリカという国と日本が戦って負けたということだと国民は思ったんです。

これは誰が見たってわかる。戦争中に学徒動員で、勤労奉仕でモノをつくって行って、どれほどたくさん使いものにならないものをつくり続けたかは、自分たちが知っているんだから。Aという工場で作ったもの、Bという工場で作ったもの、それぞれのものを集めてきて、組み立てようとしたら合わない。

そこで教育のしかたに焦点があたってくる。国民全体が均質にモノをつくる能力を持たなければいけないんだというのが、国家的コンセンサスになったと思うんです。

戦後の日本は、戦争に負けた反省の下に、

「みんなが等しい力を持たなければいけない。みんなが等しい力を持つことによって、全体が均質化されて、全体がより高い力を発揮できるようになるのだ」

そう信じて、教育体制をつくり直したと考えていいと思う。第二の富国強兵＝教育のQC化（クオリティコントロール）がはじまったんですね。これはやっぱり、兵隊さんの発想なんですね。全員が同じ水準で行動してくれないと戦闘行動が効率的にできない。こんなふうにも言えるでしょう。戦前までの教育では「何がつくれるかということ誰よりも知っている」人がいい人だ、戦後のそれは「みんなが同じものをつくれるということがいいことだ」と変わってきた。

一人で全部何かができるという特別な人になるのではなくて、みんな一緒に何かができる人になろうね、ということになった。

以前は教室で、よくこういうことがいわれていたのをご記憶ではないですか？

「日本は資源のない貧乏国だ。外国から原料を輸入して製品に加工して輸出するしか生きる道はない。勤勉な国民だけが財産だから君たちが一生懸命勉強しなきゃいけないよ」

まさに、このイデオロギーです。

「理想の祖父母」は、今の時代に生きている人という意味なんです。つまり、何もしていない人ではなくて、何かをしている人。

べつに仕事をしていなくてもいいんです。会社はやめてしまったし、リタイアしているとしましょう。でも地域社会に生きている。時間はいっぱいあって地域活動を精力的にやっている。もしくは自分の趣味がとても充実しているとか、とにかく今現在に生きて自己実現をしようとしている祖父母というのが、おそらく「理想の祖父母」だと思うんです。

そういう人たちになら求められるのは、

「何々でなければならない」

ではなくて、

「今に生きるということはどういうことなのか」

ということを孫に教えられること。

ならなければならない何かがあるわけではない。そうではなくて、自分はどう生きてきたのかを客観的に、つまり、自分はこうやったという自慢話や、成功体験の押しつけではなくて、語り伝え……孫自身に考えさせる。

そしてさらにこれから自分がどう自己実現をしていくのかということの楽しさと苦勞を孫

に語ってやるということが出来る祖父母がいたならば、最高のおじいちゃん、おばあちゃん
だと思っんです。だから、

「おまえ、な、いいか。頑張れば必ず結果が出るんだ」

という成功体験だけでは困る。

「おじいちゃんだってな、とにかく脇目もふらずに頑張ってきたんだ。頑張ってきたから見る、家がちゃんと建ってるじゃないか」

これでは困るわけですね。そうではなくて「何をしたのか」というところが生き生きと語れるかどうかです、過去を語るにしても。

「確かにおじいちゃんのつくった家はこんな小さな家かもしれないけれども、おじいちゃん自身は、あのときにな、こうこうこういうことをして、こういう大事なことがあると思って一生懸命やって、そのときにみんなと一緒にこういう時間を過ごして、その過ごした時間は、おじいちゃんにとってとても宝物なんだよ」

「何をしたいくて、何をしたのか」。それはどういうことだったのか。それぞれの時代のなかでどういう判断をして、何を大事にして自分が生きてきたのか。その結果、何ができたのかということ語れば過去を語っても、語りがいがあるわけです。

で、学力低下問題をいまだに言っている人たちの批判の多くは、実は初・中等教育が地方分権に移行するということが見えないまま、中央集権のまんまでこれからも行われていくという感覚を前提にして、おそらく批判をしているのだろうと思っんです。

だから、これから先、もし批判の対象としてウオッチしなければいけない対象は、それは**文部科学省**ではなくて、**自分たちの住む地域の自治体、もしくは教育委員会**なんだと思います。

自分の子どもがまだ小中学生ならば、市町村の教育委員会がなにを考えているのかを知ろうとすることだし、高校になれば都道府県教育委員会が何を考えているのかが問題になる。

今まで以上に自分の子どもの教育に地方行政が色濃く影響してくる。教育委員会が腰を上げなければ学校に変化が訪れない。

今までは高校は東京都がつくった入試問題を出しているわけで、それは教科書に載っていないことは出さないという前提でやっています。学習したところからしか出してはいけないと言われていた。「標準学力」だったから。二〇〇二年以降はこれがはずれて、まさに最低学力・社会基盤学力しか設定をしていませんから、受け入れるほうが「ほしい学力」を設定していいよ、という話になる。

すでに日比谷が何をやったかという、単独選抜でしょう。自分のところで入試問題をつくったわけです。これが先鞭。どんどん後に続きました。

意味するところは高校側が「自分の学校で学ぶ生徒に持っていてほしい学力」を要求できるということです。「指導要領」下の社会基盤学力からしか入試問題を出しません、ということではない。「指導要領」は社会基盤学力の枠組みとして提示されているだけのものなの

だから、我が校としては、ここまで要求しますよと。ここで初めて中高接続の問題がリアルになってくる。

ここで親の側は、

「教科書以外から出題するのはおかしいじゃないか」

とは言えないことになります。設定してあるルールが変わりますからね。

新幹線を開発したことで知られる国鉄の技師長、島秀雄さんは、こんな意味のことをおっしゃったそうです。

『できる』というのはたった一つできるやり方を見つけさえすれば言うことができる。けれども『できない』という言葉は全ての検討が終わったあとでないと出来ない言葉だ。もう検討するものがないというところまで来て、はじめて言えるのが『できない』という言葉なんだ」

そして、ほんとうにできないのかと考えつめて、彼は新幹線をつくった。

私たちは下手をすると、ちょうどこの逆をやっている気がします。たった一つの「できない」を見つけると、できないと言ってしまふ。たった一つの最悪のシナリオが見えた途端に「だめかもしれない」と言って目をそらしてしまふ。最良のシナリオを探す努力をしない。